
運命ノート

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命ノート

【Nコード】

N2650I

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

中学一年、あかつきみさ明月美沙は不思議なノートを見つける。そのノートには美沙がしなければならぬことと、しなかつたばあいの天罰この二つのことが記され続ける。このノートの真意とはいったい!?

第1頁 一日二善

運命ノート この青いノートが金色に輝く時、あなたがすべきことが金色の文字で書かれます。

また、書かれたことを実行出来なかった場合、ノートに浮かび上がっている黒字で書かれた天罰がくだります。

このノートのことは、あなたの運命の人にしか話してはなりません。

「なによ、これ」

この物語の主人公あかつきみさ明月美沙はあかつき暁中学校一年の美少女。

胸だつてDカップもある。

彼女は通学前、自身のピンクの鞆内から運命ノートなるものを見つけたのだ。上記のような事柄が表紙を開いた1ページ目に書かれてあった。

「誰が入れたか知らないけど、馬鹿らしいっいたらないわ!」

そう言うとき美沙は、運命ノートを自宅の机にほったらかしにして学校に向かった。

しばらくして、美沙の机の上には金色に輝くノートがあった。

開きっぱなしのノートの2ページ目には金色の文字で『一日二善』
、黒い文字で【一日中しゃっくり】

・
・

ここは、一年C組の教室。

「美沙！掃除当番手伝ってくれてありがとう！」

そう言ったのは美沙の親友、小柄な星乃風雅（ほしのふうか）
こと「ほしのん」だ。

「いいよ。部活も休みで暇（ひま）だったし」

箒（ほうき）で塵（ちり）を集めた美沙は、ほしのんが構えるちり取りへ塵（ちり）を掃（は）き入
れる。

「美沙、掃除手伝ってくれたし、帰りにパフェおごったげる！」

・
・

「これ美味しい！」

と巨大なチョコレートパフェをぱくつく美沙。

「美沙、太っちゃうよー」

ほしのんは心配げな顔で美沙を見つめる。

「はあ、可愛くていいなあ美沙は…」

ほしのんの言葉にチョコを唇に付けながらも美沙は

「…むぐ、あ、男子達が…ほしのん…のことかわいって言ってた

よっ」

ちょっと笑顔になるほしのん。

「それって沢田くん!？」

目を爛々と輝かせながらほしのんが聞いてきた。

「え…えっと、…さ、沢田くんもいた…と思うよ。うん」

明らかに目が動きすぎる美沙。

「うそ!美沙つたら凄くわかりやすいんだもん!でも…そんな優しい美沙は大切な友達だよ」

・
・
・

ここは、美沙のプライベートルーム。

「パフェ美味しかったー…うーん…なんか忘れてないかな…」

美沙は、電気を消し、ベットに横になりながら今日一日を回想する。

ヒクッ!ヒュック!ヒクッ!……………2時間後…ヒ

クッ…ヒグッ!……………まさか!」

美沙は慌てて電気をつけ机に向かう。

「『一日二善』!?ヒュグ!天罰は【一日中しゃっくり】ー!ヒグッ!」 頭をめぐらせる美沙。

「…ヒクッ!良い事なにか…ビック!…あっ!掃除手伝った…ヒグッ!…ヒクッ!…他には…ないヒグッ!どうしよう!ヒグッ!……………」

……………」

「あれっ?…止まった。あたし他に何かしたかな!?……………気をつか

った…こと!？」

運命ノートはその役割を果たし終えるまで一つ目のなすべき事として『一日二善』を記し続けた。

}つづく{

第2頁 仲をとりもつこと

ここは、美沙の夢と希望が盛り沢山の自室。

「う、うーん…」

夜が明け、カーテンの隙間から朝日が 運命ノートからでる金色の閃光がほとばしった。

「ウガーーーーー!!!」

眩しすぎる光りに、勢いよく目覚めるこの部屋の主。

「…全く、今日はなによ!」

そう言いながら、運命ノートを開く明月美沙。あかつきみさ

「なにになに… 『二人の仲を取り持つこと』… って誰のよ!それで天罰は…!!!」

黒い字で書かれた【事故死】に目が点になる美沙。

「な、な、な、なによ事故死って!!!そ、そんなことあるわけ…きや…」

その時、地震が来た。

腰をぬかす美沙。

今さつき美沙がいた場所に水仙をさしていた花瓶が割れて落ちて
いるではないか…。

・
・
・

一年C組のクラスに自分の机で頭を抱え込む美少女の姿があった。
「うー！…どうしろってゆうのよ…そうだ！ほしのんと…」

「あかつき明月さん、あかつき明月さん！」

運命ノートのことであらうついてた美沙は横から呼ばれ続けるこ
とに怒りを覚えた。

「なによ！！！考え」…」

そこには、なんと顔の良い沢田くんが立っているではないか。

「ご、ごめん。取り込み中だったんだね。…昼休みに体育館裏に来
て欲しいんだ…」

と顔を赤くした美形の沢田くん。

「へ？ちよ、ちよっと！」

そう言つと、沢田くんは走り去っていった。

話題騒然となるクラスメイト達。

「「完全無欠男」沢田が「天使」明月に告るらしいぞ！」

「えー、沢田くん良いなと思ってたのに…」

「やっぱり、美少女は顔が良い男にもっていかれるのかー」

(美沙が沢田くんからの呼び出し！)
動揺するほしのん。

・
・
・
昼休みの体育館裏。一組の男女が向かい合っていた。

「明月さん、……いいよね。だから呼んだんだけど、
僕……好きなんだ。……ほしくて……」

「……わかったわ」 盗み聞きしていた男子は一年C組に駆け込むやいなや

「明月、オツケーしたぞ！」
ざわつくクラス内。

それを耳にしたほしのんはクラスから走り出た。彼女が走る道に雫が舞った。

・
・
・
思い詰めたほしのんは校舎の屋上から身を乗り出していた。

「待つて、ほしのん！誤解なの！」
校舎前のグラウンドから大衆に混じって美沙が必死に叫ぶ。

「なにが誤解よ！私が沢田くんのこと、好きなの知ってたくせに！
……親友だと思ってたのに……」

泣き腫らすほしのん。その耳にすぐ傍から声がとどいた。

「はあ…明月さん…あかつき…が言っていることは本当だよ。星乃さん…」
振り返るほしのん。そこには、息きれぎれの沢田くんが立っていた。

「…美沙と結ばれたんでしょ。良かったね。わたしのことはほっとい…！」

喋った拍子ひょうしに足を滑らし落下するほしのん。

彼女は目をつぶり

(美沙、沢田くん、お母さん、みんなごめんなさい……)
右手に感じる温かい感触に目を開けるほしのん。

「…星乃さん…ごめん…僕のせいで…クッ！」

見開いた、ほしのんの目に映ったのは、柵の二本の鉄棒の間から俯せうつぶせになりながら、必死でほしのんの腕を掴む沢田くんの姿が…。

「沢田くんは悪くなんかない…全部私が…」

「うぐ！…違うんだ！僕が…いけなかった。周りからは…うっ…完全無欠とか言われてるけど…ウグッ！」

沢田くんの腕は軋み青黒くなってきた。

「…！沢田くん、離して！沢田くんの手が…！」

ほしのんの頬を幾筋もの涙が伝う。

「…好きな…女の子に…面と向かって…告白すること…すら出来なかつた…」

沢田くんは絞り出す声で話し続ける。

「…え…」

動揺するほしのん。

「うっ！…こんな、僕で良かったら…付き合っ…もらえませんか？」

苦痛に耐えながらも必死に話す沢田くん。

「……はい！！」

泣き濡らした顔の返事は一つしかなかった。

今迄曇天いままでぐんたてんだった空から光が差し込み始めた。

美沙は、到着したレスキュー隊員の間をぬうかのように抜きさり、二人を引き上げる。

・
・
・

美沙とほしのんの二人で帰宅中。

美沙は事の顛末を話し始めた。

「あれは

『明月さん、星乃さんと仲が良いよね。だから呼んだんだけど、僕は星乃さんが好きなんだ。間を取り持つてほしくて…』

『ほしのんの沢田くんへの気持ちもわかってるし、わかったわ』

「ということなのよ」

と腕を組む美沙。

「ごめんなさい美沙。私はてっきり……」

ほしのんはぐったりした様子で言葉を返す。

一人考える美沙。

(運命ノートにあった【事故死】って…ほしのんのことだったのかも……)

「美沙！わたし、あなたが本当に困った時は絶対助けてあげるから！約束ね！」

「ちょっと、ほしのん！」

二本の細い小指は、鉄枷てつかせよりかたく結ばれていた。

{}つづ{}く{}

第3頁 英語検定一級合格

ここは、あかつきみさ明月美沙の秘密の花園（部屋）。

「こんな英単語、見たこと無いわー!!」

美沙はブチ切れ、英語の辞書が宙を舞う。

「こんなに勉強しなきゃなんないのも…」

美沙の美しい顔（目の下に隈がある）で青い一冊のノートをにら睨む。

開けつばなしの運命ノートには金色の字で、『英語検定一級合格』

また、黒い字で、【鼻毛がなにをしても鼻から四センチでる（三日間）】とあった。

「検定は別に良い。…でも…鼻毛は死んでもイヤ!!」

「NO鼻毛」と書かれたハチマキを巻き、猛烈な勢いで勉強に打ち込む美少女美沙。

・
・
・
英語検定の試験日終了。・

ついに、家のポストで英検の結果発表の通知を受け取った。
封をとく美沙。彼女の口からは……

「合格。そしてNO鼻毛!」

…ひたすら同じ言葉が連呼されていた。

『英語検定一級……合格』

「よし!NO鼻毛!」

しかし、鼻に違和感を覚える美沙。手鏡で鼻を確認する。

「ギャーーーーー!!!」

手鏡に映るっていたのは地面に対して平行に長く伸びる一本の剛毛だった。

「なによこれ！太さ鉛筆クラスじゃない！息しづら!!!」

美沙が運命ノートを確認すると、金色の文字で『英語検定一級合格：小さな字で（満点で）』と書かれているではないか。

「見えるか！」

美沙は鼻毛処理やマスクで隠すものの、のこぎりでも切れず、隠しても貫通し、結局三日間休む羽目に。

「もう、頭にきた！燃やしてやるんだから!!!」

すると、運命ノートは金色に輝き、ノートの表紙に「ノートを大事にすること。しなかつたら天罰。」と書かれたではないか。

「!!!。あんた意識あるだろう　　!!!」

美沙は、怒りに怒った。

{}つづく{}

第4頁 生徒会長になること

ここは、暁中学校の玄関。

この話の主人公あかつきみさ明月美沙は「必勝」と書かれたハチマキを額に巻き、登校して来る生徒達に熱心に語りかけていた。

「私が生徒会長に立候補した明月美沙です！！私がこの学校をより良く変えて見せます！そのためには、皆様方の清き一票がどうしても必要です！！」

こんなたいそうなことを言いながらも彼女の頭をよぎるのは

運命ノートの金文字で書かれた『生徒会長になること。』と黒い文字の「バストのカップサイズをギリギリBカップに格下げ。生徒会長になれたら元どおり。』

（どうか！わたしの胸のために清き一票を！！）

まさに心の叫びであった。

美沙は生徒達のため（胸のため）学校内を東奔西走し、ほしのんや沢田くん、クラスの皆の努力と協力、また、美沙自身の才色兼備も助け船となり前生徒会長との接戦に持ち込んだ。

・
・
・

ここは、体育館。二人の生徒会長立候補者は壇上で鎮座し、投票結果が出るのを待っていた。

(元生徒会長) (私が学校を更に良くしなければ!!)

(美沙) (お願い!ぎりぎりBカップはいや!!)

「…… たった今、投票結果ができました!結果は……… 同票です!」
と進行役の男の子。
ざわつく、体育館内。

「…… えー、お静かに願います。投票結果が同票ということでしたので、一発勝負のじゃんけんで決めさせていただきませう!…… 両者壇上前の方に起こし下さい」

「泣いても笑っても一発勝負よ!」
と元生徒会長。

「はい。わかっています」
美沙も元生徒会長のプレッシャーをあっさりかわす。

「それでは、いきます!最初はグー!ジャンケン・ポン!

(元生徒会長) 「?」

(美沙) 「?」

「良かったー(胸)」
喜びをあらわにする美沙。その後ろを女子生徒が小走りで通り司会の元へ行き何か話し込む。

「ええと…… 投票箱の底に投票用紙が一枚くっついてたもようです…… 元生徒会長にもう一票!」

破顔一笑の元生徒会長。

崩れ落ち号泣する美沙。

「う、うー、うえん」

慰める生徒会長。

「泣かないでよ。いい勝負だったじゃない。あなたには来年があるわ」

それでも泣き止まない美沙。

(…うー、違うの！生徒会長とかじゃなくて…む…胸が縮むー…
！…！)

その後、美沙はブラのカップを二つも下げたとゆう。

…
…
…

第5頁 夜間フルマラソン上位入賞（ ）

主人公、赤月美沙^{あかつきみさ}は、早朝3時より栄養ドリンク片手に走り続けていた。

「はあはあ…夜間フルマラソン上位入賞（ ）なんて可能なのかしら？」

汗にジャージを濡らしながら走り続ける。

「【一週間ずっと変顔】は、学校休めばいいけど、あんまり休みすぎるともやだしなー」

ここ、二ヶ月の毎日二十キロの走りこみ二本とジムでの徹底的な筋肉トレーニングにより筋肉の鎧を手に入れた美沙。

「…はあ…体重とウエストは良かったけど……」

激しい運動の結果、腹筋はばきばきに割れ、胸はまな板状態、お尻も垂直ちかくなってしまうていた。

「私の青春返せー！」

•
•
•
大会当日、夜間フルマラソンだけあって、もうすでに夜中の十一時五十八分。ゴールまで残り五百メートルをきっていた。

美沙は鍛えぬかれた体で外国女子選手とトップ争いをきょうじていた。

「なかなつかー、やりつーますねー」

外国人選手から美沙に話しかけた。

夜の十二時をすぎた。

「え、ありがとうございます」

と笑顔で返す美沙。

「！！！！」

にこやかだった外国人選手が美沙の顔を見るや表情が一変する。

「ほめてーあげたのーに！ なーんて失礼なー人！！」

「え、なんで？」

動揺する美沙の脳裏を気掛かりだったことがよぎる。

（運命ノートに金色の文字で『二ヶ月後の夜間フルマラソンで上位入賞（ ）』！）

（まさか！ あの不自然な（ ）！！）

美沙は持ち歩いていたコンパクト式の鏡で自身の顔を確認する。

「！！！！」

言葉で言い表せないほどひどい変な顔になっているではないか。

（あの、くそノート！）

「こ、この顔は違うんです」

「うるーさいです！ あなーたみたいな人にはぜがひーでもまけまーせん！」

「……こちら中継車です……ここでトップ争いを演じている二人。奇跡

の中学生、あかつきみさ明月美沙と去年チャンピオン、ルーリ（全国電力）が舌戦を繰り広げているもようです！」

と中継車に乗ったりポーターがカメラに向かって喋った。

「カメラで舌戦とトップ争いをお楽しみ下さい！」

全国放送のカメラが二人をとらえた。

「そのーむかつくかおをやめーてくだーさい！」

「これは…その病気というか…あの…」

美沙の顔は下品にニヤつき、まるでルーリ（外国人選手）を挑発しているようにカメラには映っていた。

・
・
・

「優勝は明月美沙選手です！」

表彰台でトロフィーを受け取る美沙。

ギャラリーからの拍手はまばらでルーリにいたっては睨んでいた。

「あのーひきょうなーおんなはゆるーせません！」

美沙の顔により大きく体力を使い順位を落としたルーリは激怒していた。

ギャラリーらの目にもアンフェアと映ったに違いない。

・
・
・

ここは、美沙の部屋。一冊ノートにがぶりよる美沙。

「『二ヶ月後の夜間フルマラソンで上位入賞（その日のうちに）
！！！！後づけするなーーーー！！！！』
美沙は吠えた。

しかも一週間も休む羽目に……トホホな美沙なのであった。

} } } } }

第6頁 女子ボクシング選手権全国制覇

ここは、女子ボクシング部の部室。夜が明けきらぬうちから、サンドバックが鳴いていた。

「……クツ、便通がじわじわ増えてきてる！出しても治らないし……急いで全国制覇しなければ！！」

跳びはねる重いはずのサンドバック、渴いた音が部室にこだましていた。

「次は腹筋……ウグツ！……まだ大丈夫！便はでない……」

今回は、すべきことが『女子ボクシング選手権全国制覇』で天罰が「これから毎日便意をもよおし続ける、女子ボクシング全国制覇制覇までの期間が延びれば延びるだけ便通が悪化する」だったため急遽女子ボクシング部に入り桁外れの練習量をこなしていた。

「……早く……早く制覇しないと……一生便器ですごさなくてはならなくなる！……おまるに座って授業は絶対いや！」

日々、高まる出しても治まらぬ便意に耐えながらも部活をボクシング部に変えて奮闘する美沙であった。

・
・
・

ここはある大きな体育館。その中心に特設されたリングの上で、女子ボクシング選手権の決勝戦が行われようとしていた。

「ファイト！」

審判の合図とともにまくはきつておとされた。

「あなた…入部して二ヶ月って聞いたけど本当？」

美沙の対戦相手はヘッドギアの前に腕を構えながら質問する。

「ええ、…そうよ。…話してないで勝負しましょう…時間が無いの…」

（うー！ お腹イタ！短期決戦にしないと…）

美沙は、左のジャブ、右のストレートパンチとコンビネーションを繰り返した。

「…ところで、あなた、何で毎試合内股な…の？」

（言えるかー！）

唸る美沙の左ストレートパンチをかわす対戦相手。

左フック、右ジャブ、左ストレートと立て続けに打ち込む対戦相手。

対戦相手の左フックが空いていた美沙の左脇腹をえぐる。

「うぐ！」

（便が…！）

崩れた美沙のガードをみのがさず、左ストレートを美沙のお腹に打ち込む。

「ギャー！」

(実が入口まで！)

「パンチの威力はどう？…効いているみたいね。これで終いよ！」
渾身の一撃が美沙のお腹に突き刺さった。

「ウググー！！」

膝をつく美沙。

「勝ったみたいね。あなたはなかなか強かったわよ」

(便がーーーーー！あっ…)

レフリーがTKOを宣言

「……よくも！乙女のプライドを！！！」

立ち上がった美沙は、瞬く間に対戦相手に詰め寄ると前傾姿勢で体を左右に振りながら、右から左からとガードを貫通する怒涛のラッシュで相手を沈めた。

「勝者…赤コーナー、明月美沙！！」

賞状の授与式。そこに美沙の姿はなかった。

「私に、勝つときながら……あの子……どこに……？」

ここは、とある閉ざされた空間。

「……………ふう。スッキリした。」

そう……美沙の幸せそうな声が聞こえたそうなの。

{}じじく{}

第七頁 全国社交ダンス大会優勝

美沙は二年生になり、生徒会長に上りつめていた。

「おめでとう！美沙、すっごくなりたがってたから嬉しいでしょ！」

生徒会室の中、二人は会話していた。

「うん！うれしい！！」

美沙の瞳が潤む。

（美沙ったら、泣く程成りたかったんだね。わたしも泣けてきたよー）

ほしのんがもらい泣きしているなか美沙は

（お帰りー胸！ウェルカム、バストアップ！！）

まったく違うことで泣いていた。

．．．
ここは、社交ダンス教室。その中に一際練習に励む者の姿があった。

「【中年の男性からものすごく好かれやすい体質に徐々に変化していく】……か、考えただけでも恐ろしい！」 美沙はそつつぶやきながら必死に練習に励んでいた。

（パートナー……のおじさん、プロで上手いけど……）

「…そう！良いよ！センス良いよ、臭いも良いねー」

（嗅ぐなー！！）

そんなこんなで、恐怖のレッスンは続いていった。

・
・
・
全国社交ダンス大会もついに決勝戦をむかえていた。

（ここで、優勝しないと…おじさん達に…）

美沙はそう考えながら周りを伺う。この会場にいるおじさま方の視線は美沙に集中していた。

（グアーーー！見すぎだー！！）

ドレスの前を両手で隠す美沙。

「スンにちは。お手柔らかスンに頼むよ」

そう、ライバルペアのおじさん。

（スンスンかぐなー！！）

・
・
「あっ！…イタタ！」

おじさん達の熱い視線に失敗し、こける美沙。

「大丈夫かい？」

手を差し出す。さすが、プロのパートナー。落ち着いたものである。

「あ、ありが……」

(鼻の下伸びすぎー！やばい！体質変化が早い！それに他のペアはミス一つしていない！！終わった！！)

こけたものの最後まで踊り抜いた美沙ペア。

司会はマイクを握りながら
全国社交ダンス大会 優勝は……」

全てのライトが落とされ真っ暗になった体育館。四組のペアを天井から一つのライトがいたりきたりしながら照らします。

「…この二人です！
パッ！

「えっ！！うそー！」

「やったよ！ハニー！」

抱き着こうとするプロのダンサーを左手で押さえながら、理由を考える美沙。

「！！。もしかして……」

美沙は視界を審査員席に移した。

「！！！！」

そこには、鼻の下を延ばしきった五人の男性審査員達の姿が。

「良かったー！優勝できてー！！」

美沙は、自室で優勝トロフィーを見ながら独り言。

そんな時、ノートが金色に光始めた。

「また次の課題！？」

不機嫌になった美沙は、渋々運命ノートを開いた。

そこには金文字で

『あなたは、私と与えた試練を経て以下に記す美德を手にした。時は満ちた、いずれカボチャの馬車たるものがそなたを導くだろう
私は魔法使い』

『一、人より多くの善い行いをする事』

『二、友情を大切にし、真の友をもつ事』

『三、大きな志しと行動力をもつ事』

『四、英語による話術が巧みな事』

『五、根気強さと強靱な体力をもつ事』

『六、忍耐力と強さをもつ事』

『七、品性が高いこと』

運命ノートには、そう書かれてあった。

$\{\hat{U}U\}$

最終頁 運命ノート

ここは、イギリス行きの飛行機内。そこに美沙の姿があった。

彼女がうちたたてた数多くの功績により、交換留学生の話がまわってきたのだ。

「カボチャの馬車って、留学のこと？それとも飛行機？……ねえ答えてよ！私の魔法使いさん！」

（すでに運命ノートは力を無くしてしまっていた……）

「……うんともすんとも言わなくなると、淋しいじゃない……」

イギリスにある名門イートン校で美沙はイギリス皇太子様に見初められ結婚する。

それから、五年の月日が流れた。

「……あなた……笑わないで聞いてくれる？」

美沙の問いに美しい皇太子は……

「もちろん……」

「……実はね。昔、このノートと……」

美沙が差し出したのは、薄汚れた青色のノートだった…
ノートの中を見た王子は

「これは……ちょっと待ってて美沙……」

皇太子は慌ただしく寝室を出ると一冊の古ぼけた赤いノートを持って帰って来た。

「……これなんだけど……」

皇太子の手には一冊の赤いノートが握られていた。

「……この赤いノートに自分の理想の女性像を書く……その理想の相手と結ばれる。……王室にはそういう言い伝えがあつて……ここに……僕も書いたんだ……」

皇子がノートを開き指し示したさきには

『一、人より善い行いをする者』

『二、友情を大切にし、真の友をもつ者』

『三、大きな志しと行動力をもつ者』

『四、英語による話術が巧みな者』

『五、根気強さと強靱な体力をもつ者』

『六、忍耐力と強さをもつ者』

『七、品性が高い者』

赤いノート。そこに書かれていたのは、美沙が持つ運命ノートに書かれていたことと………

〽おわり〽

最終頁 運命ノート（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。後書きまで目をとっしていただいているあなたは素晴らしい人です。また、書きたいことが浮かんだら執筆すると思いますのでよろしくお願いします

m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2650i/>

運命ノート

2010年10月14日23時43分発行